

牧草と園藝



緑化植生シリーズ(4)

暖地の芝生——緑はいろいろ——

関東以西の暖地の芝生には、いろいろな草種・品種があります。大別すると、日本芝—ノシバ、コウライシバなど、この中には、ヒメコウライシバ、キヌシバ、トウキヨウシバ、ダイブツシバ、など含まれる—西洋芝—寒地芝—ベントグラス、ケンタッキーブルーグラス、クリーピングレッドフェスク、チューイングフェスク、ペレニアルライグラスなど、—暖地芝—バミューダグラス、センチペッドグラス、パヒアグラス、ダリスグラス、キクユグラスなどに区分されます。沖縄や九州南部などの地帯は暖地芝で良い訳ですが、北海道、東北など寒冷地を除く中間地帯は、寒地芝では夏の暑さに弱く、暖地芝では冬の寒さに弱く、このため従来は殆ど日本芝が使われてきました。ところが日本芝は、夏芝に属するもので、4月から10月までは緑ですが冬は褐色になってしまう。これに対し寒地芝はこの地帯では冬芝であって、11月から3月に緑を保つ芝生です。

外国では日本芝を使うのはかなり暖い地帯に限られており、この中間地帯は日本と同様エバグリーンの芝生を維持するのにどうしたら良いか問題になっているものの、かなりの地域で寒地芝を上手に使って成功しています。写真はこの2月に撮ったアメリカ、カリフォルニア州のサンフランシスコに近いサイプレスポイント・ゴルフクラブの15番グリーンです。ベントグラス、ケンタッキーブルーグラスなどを使って、太平洋に突出た岩石の上に見事な芝生を作りあげています。後方の樹木はイトスギの一種でサイプレスといい、バンカーの砂は真白な石英（ペブル）の砂で、このへんをペブルビーチというのもそのためですが、白い砂、緑の芝、青い大洋と年代を経た樹など、夏冬通して美しさを保ち、またゴルファーを楽しませているのですが、正に天然と人工の美が混然として一体となり一幅の絵になっています。

この様に夏冬通して緑の芝生にしたいのが念願ですが現状では、充分な管理の行届いたゴルフ場を除いてなかなか面倒です。代表的草種、品種の長所・短所は次の通りです。

ノシバ 粗剛であるが土壤を選ばず、踏圧に強く、耐病性も抜群です。短く刈込めば芝生として充分使えゴルフ場のラフ、飛行場、路傍、分離帯などに用いられます。従来は張芝ばかりであったが、最近の研究により、種子による繁殖も可能となりました。ただ播種期は5～6月に限定されます。また発芽、初期生育がにぶいので雑草に負けるおそれがありその対策が必要です。播種量は20～30^g/m²、冬期褐変します。

コウライシバ（ヒメコウライシバ） ノシバよりせん細で美しい芝を形成し、ゴルフ場フェアウエイやサマーグリーンに用いられ、大部分の公園、庭園、城郭などに古くから使われていますが、種子増殖は現在のところ困



サンフランシスコに近いサイプレスポイントゴルフ場(2月)

難で専ら張芝によっています。肥料要求量も少く、耐病性であるが、夏芝で冬期褐変します。

バミューダグラス 暖地型西洋芝の代表的なもので、コモンバミューダグラス、ショートバミューダグラスUは種子繁殖ができます。生育が早く、土壤適応の幅も広く、刈り込みにより美しい芝生を形成しますが、冬季間は地上部は枯れ春に再生します。アメリカで育成されたティフグリーン（ティフトン328）、ティフウエー419、ティフドワーフ、サンタ・アーナなどは芝苗（芝生をバラバラにほぐした苗）を植えて造成します。芝苗は1,000 m²分に2,000^gの量でよく、20cm間隔位に挿し植えしたり、苗をバラ散いてデスクハローで埋め込ませる方法をとります。

ケンタッキーブルーグラス 従来のコモンケンタッキーブルーグラスは耐寒性強く比較的管理も容易で、寒地型の代表芝生とされてきましたが、暖地の盛夏時に病気や生理的に弱い欠点を持っています。近年品種改良が進み、気温については-34℃から+41℃まで生育も可能となり、耐陰性の品種、耐塩性の品種なども開発されました。暖地向耐暑耐病性の高い品種は、フィルキング、パロンが特に良く両品種の混播芝生は、夏期2～3回のトップジンM、ターサン199Lなど殺菌剤を斑点性病害の発病期前に適切に予防散布することにより、周年緑色の芝生を作ることも出来るようになりました。

ベントグラス 主としてゴルフ場のウインターグリーンとして用いられていますが、夏期は10ミリ以下に刈高を下げないようにし、また前記殺菌剤を予防散布することで利用されています。クリーピングタイプのベントクロスベントが最も上質ですが、コロニアルタイプのハイランドベントも使われます。尚ベルベットベントタイプのキングスタウンはPH 5.5で生育し、排水条件を良くしてやると素晴らしいエバグリーンの芝生を楽しむことができます。